

【優秀書評賞】ホワイト・フラジリティ：私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか？

名前 谷地 茜里

人種差別が世界中に蔓延していることは、誰もが知っているだろう。なかでも特に注目される黒人差別について、私たちはどれだけ深く考える機会を持ってきたらうか。本書では、長年続く社会構造化した黒人差別の背景と原因を丁寧に紐解いている。本書は白人読者を想定して書かれているが、読み終えたとき、果たして私のような日本人も「自分はレイシストではない」と言い切れるだろうか。ここで紹介するのは、人種差別に改めて向き合うきっかけとなる一冊である。

本書は、著者の私生活での経験や自身が実施したレイシズムに関するワークショップを手がかりに、アメリカ合衆国における黒人差別の構造を社会的・文化的観点から読み解いている。事例ごとに歴史的・社会政治的背景にも触れ、差別を制度的・構造的問題として捉える視点を提示し、その再生産のメカニズムを論じている。ワークショップでは、白人参加者が自身の白人性を問われると、憤慨、泣く、逃避など多様な防衛反応を示した。こうした反応の背景には「差別主義者＝悪人」とする短絡的理解があり、リベラルな白人ほど「自分はレイシストではない」との思い込みが強く働くという。

著者は、このように特権的立場を自覚できず批判に過剰反応する姿勢こそが、白人中心の社会構造を温存し再生産する最大の要因だと主張し、これをホワイト・フラジリティ＝白人の心の脆さとして提示する。白人が自身の白人性を自覚できないのは、長い歴史の中で「白人として見られる」経験をしてこなかったためである。彼らは有利な社会構造を無意識のうちに当然と享受しつつ、それを個人の努力や能力の結果と捉えがちである。この理解には近年のアメリカ社会に根付く個人主義が大きく影響している。個人主義は、成功や失敗の要因を制度や構造ではなく「自己責任」と説明しようとするため、構造的差別を見えにくくしている。さらに、レイシズムも悪意ある個人の問題へと矮小化され、「自分には関係ない」と切り離す姿勢が差別の不可視性を一層強化しているというのだ。

著者は、レイシズムをなくすには「考え続けること」が不可欠であり、長年向き合っても「もう学ぶことはない」と思ってはならないと説く。また、無意識の思い込みを点検し、他者の意見に耳を傾け続けることは「生涯続くやっかいなプロセス」であるが、同時に変化をもたらす力を持つ必要不可欠な営みであると述べる。

本書の顕著な魅力の一つは、読者に迎合することなく、むしろ意図的に不快感を喚起する語り口にある。筆者は白人の誤った自己認識そのものが差別構造の温存に加担していることを繰り返し強調し、読者の防衛的な感情に真正面から問いを投げかける。あえて挑発的とも取れる表現を用いることが、読者の思考を揺さぶり続ける装置として機能している。さらに、同一の主張を執拗とも言えるほど丁寧に反復する筆致は、レイシズムに無自覚に生きてきた白人に対して、「なぜそれが問題なのか」を本質的に理解させようとする誠実な試みと捉えられる。その構成は、白人のみならず他の人種にとっても、差別と特権の交差する複雑な構造を解きほぐす上で極めて有効であり、「思考のプロセスへの介入」として高く評価できる。

しかし、本書が著者自身の経験や観察に大きく依拠している点については、主観性が強く出すぎており、構造的な問題に対する多角的な視点を欠いているようにも感じられた。冒頭では歴史的・社会政治学的な背景に触れ、差別を構造的問題として捉える視点が示されていたが、以降は筆者の体験談が中心となり、個人の語りに重心が移っていく。こうした語りは臨場感があり理解を助ける反面、読者によっては「著者の価値観が前面に出すぎている」と受け取られる可能性もある。もし著者の語りに加えて、統計データや心理学的な知見、格差を可視化する図表などが補足的に盛り込まれていれば、主張に客観性と多様性が加わり、より説得力のある一冊になったであろう。

全体を通して見ると、本書は人種差別という複雑で感情的になりやすいテーマを構造的かつ理論的に捉える視点を提示しており、「白人の心の脆さ」という概念を通じて、白人が差別に向き合えない理由を至極丁寧に解き明かしている。日本においても差別を自分とは無関係なものと捉える傾向は根強いが、本書はその安易な自己認識を揺さぶり、「自分は本当にレイシストではないのか」と問い直す契機を与える。

たとえば、本書の「白人の心の脆さ」を日本の「マジョリティの心の脆さ」に置き換えてみよう。そうすると、日本社会でもマイノリティや外国人を排除する風潮が根強く続いていることに対して、マジョリティの課題が見えてくるかもしれない。差別に沈黙するのではなく、むしろ私たち自身の無意識の偏見や特権を可視化し、自らを顧みることを促す点で、本書は日本人にとっても大きな意義を持つ一冊であると考えている。